

## NEWS REPORT

### 平成22年度業績表彰の授与式が行われました

平成22年7月1日で放医研は昭和32年の設立以来満53年目を迎え、同日に重粒子治療推進棟大会議室において、創立記念式典が行われました。その中で理事長表彰が行われ、顕著な成果を上げた場合などに贈られる業績表彰として9名の職員と、学会等の表彰を受賞した職員に贈られる特別表彰として15名の職員に、それぞれ賞状と記念品が授与されました。

今回の授与式では、理事長から各受賞者に「今回の受賞を契機に更に業務に励んで下さい」という話がありました。我々職員はこのような機会を励みに、着実な業務遂行に取り組みたいものです。

広報課



理事長から表彰状を受け取る受賞者

#### 平成22年度業績表彰受賞者、受賞内容

所属・氏名	受賞内容
重粒子医科学センター 村上 健	HIMAC共同利用研究および重粒子線棟増築(治療エリア建設)の推進
緊急被ばく医療研究センター 立崎 英夫	緊急被ばく医療における国際展開と国際ネットワーク形成
基盤技術センター 中村 秀仁	プラスチックの放射線検出器への応用展開
分子イメージング研究センター 青木 伊知男	機能性造影剤とナノ粒子の開発による磁気共鳴分子イメージングの開拓
情報業務室 黒田 典子	WEBリクルートシステムの開発
基盤技術センター 石川 治夫	新治療研究棟の増設促進
企画部広報課 今関 博子	HIMAC15周年記念講演会を中心とした広報業務における顕著な功績
総務部契約課 小島 謙次郎	所の各種契約手続きの改善及び業務主導による一般競争入札への移行に貢献
基盤技術センター 内田 晴康	研究所における作業環境に対する安全確保への取り組み



特別表彰受賞者の皆さん

業績表彰を受賞された皆さん方の横顔と受賞のことは次ページに記載しました。

#### 目次

- ◆ NEWS REPORT  
平成22年度業績表彰者の授与式が行われました…………… 1
- ◆ 栄えある受賞  
受賞された皆さんと受賞のことは…………… 2
- ◆ Flash NEWS  
受賞安全推進月間における、ポスター及び標語について…………… 3
- ◆ 栄えある受賞  
本多光男さんが安全推進月間標語部門最優秀賞受賞、3年連続の快挙… 3
- ◆ NEWS REPORT  
REMATウクライナ訓練…………… 4

- ◆ NEWS REPORT  
「放射線生命科学に関する放医研国際シンポジウム」の開催報告…5,6
- ◆ おしらせ  
放医研第17回公開講座…………… 6
- ◆ Flash NEWS  
アセチルコリン神経の賦活薬は大脳皮質基底核変成症等の症状を改善するか?…7
- ◆ 栄えある受賞  
松本謙一郎氏がAOB研究会奨励賞を受賞…………… 8
- ◆ NEWS REPORT  
研究倫理審査委員会の委員長を引き受けるにあたって…………… 8



## 受賞されたみなさんと受賞のことば



村上 健さん

業績表彰にご選定いただきありがとうございます。今回の件は、物理工学部に限らない多数の方々のご参加、ご苦労があつてのものと思っております。私個人ではなく、私が多数の方々の代わりに受けていただくと認識しております。重粒子治療がますます発展することを期待しております。



黒田 典子さん

この度は、情報業務室長を始め、情報システム開発課、情報利用推進課、人事課と連携し、成し得た業績として評価されたことを大変光栄に思います。放医研に勤務し15年、様々な研鑽を積ませて頂きましたことを深く感謝致します。



立崎 英夫さん

表彰ありがとうございます。国際展開は当然一個人で推進できるものではなく、旧国際室から人材育成・交流課の国際部門の皆様、研修会等協力の皆様、そしてセンター長、運営企画ユニットや当センターの皆様と一緒に力を併せてきた成果です。改めてお礼申し上げます。



石川 治夫さん

業績表彰の受賞大変に光栄に思っております。今回の受賞にあつては、物理工学部や施設課ほか関係者の協力があり受賞できたと思っております。今後とも研究所のサポーターとして努力したいと思います。大変ありがとうございました。



中村 秀仁さん

この度は、名誉ある賞を頂き、心より厚く御礼申し上げます。また、受賞に際し、大変お世話になりました関係者の皆様には、心より深く感謝申し上げます。近年の科学技術の著しい進化に伴い、1世紀前では出来なかった事が、今日では出来るようになってきました。今一度、基礎研究の原点に立ち返り、未開の領域を切り拓けますよう全力で頑張りたいと思います。



今関 博子さん

この度は立派な賞を頂き、大変嬉しく、光栄に思います。様々な部署の方々のご協力があつての広報課です。皆様のご協力を得、広報課全員で目の前の仕事を進めてきた事が、このような賞に繋がったのだと思います。課長を始め、皆様方へ感謝申し上げます。



青木 伊知男さん

この度の業績表彰を光栄に思います。この表彰は、熱心に研究に取り組み、また研究を支えているチームメンバー全員への表彰であると理解しています。また、菅野グループリーダー・藤林センター長のご支援に感謝します。今後も放射線医学に貢献できるよう決意を新たにしています。



小島 謙次郎さん

放医研に採用され丁度20年、このような形で表彰されたことは大変光栄に思います。今まで御指導下さった上司や諸先輩方、共に汗を流した皆様に心より感謝致します。今後もこれに恥じぬよう精一杯頑張りたいと思います。有難うございました。



内田 晴康さん

この度は立派な賞をいただき大変うれしく、また光栄に思います。この表彰は、常日頃業務にご協力していただいております、研究所職員の皆様のお力だと感じております。また、表彰に際してお力をいただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



## 安全推進月間における、ポスター及び標語について

放医研では、研究所内で活動するすべての人の安全の確保と意識向上を目的とし、7月を安全推進月間としています。この安全推進月間は、平成20年度より開始され今年度で3回目となります。この一環として、安全活動の啓蒙のため、ポスター・標語を募集したところ、ポスター10点、標語21点の応募があり、厳選な選考の結果、ポスター部門では最優秀賞1点、優秀賞2点、標語部門では最優秀賞1点、優秀賞3点が選ばれました。

受賞者は、7月1日の創立記念日記念式



**【最優秀賞】**  
 気をつけよう なれた所と 慣れた頃  
 (本多光男さん)

**【優秀賞】**  
 いつもOne for all & All for oneの心がけ  
 (藤田 敬さん)  
 慣れたころ 油断をします 怪我します  
 (日暮昭芳さん)  
 あなたが規則を守れば 規則はあなたを守る  
 (日暮昭芳さん)



## 栄えある受賞

### 本多光男さんが安全推進月間標語部門最優秀賞受賞、3年連続の快挙



基盤技術センター安全・施設部施設課所属の本多光男さんが安全推進月間標語部門で最優秀賞に輝きました。これで本多さんは3年連続の受賞となり、まさに快挙と言えます。広報課では、お忙しい合間の時間を頂き、本多さんに標語作成の秘訣をうかがってきました。

広報課：普段はどのようなお仕事をされていますか

本多さん：重粒子治療推進棟の空調・機械設備の保守、管理業務を行っています。機器の経年劣化に伴う故障が多く、特に夏は空調機器が壊れると大きな影響が出るので、毎日念入りに機器の点検を行っています。

広報課：文学的なセンスはどのように磨かれましたか

本多さん：若い頃から俳句、語呂合わせ、短い文章を自分で作ることが好きでした。普段からサラリーマン川柳、都々逸(どどいつ)などを見たり聞いたりするのが好きです。

広報課：良い標語を作る秘訣はありますか

本多さん：普段から戒めの言葉を思いついたときには、メモを取るようにしています。仕事で故障箇所等について、必ずメモを取るよう教えられて来ましたが、この習慣が受賞につながったのだと思います。

広報課：放医研への思い入れをお聞かせください

本多さん：皆さん、凄いいことを研究されています。自分の仕事は黒子役で地味な仕事ですが、皆さんに迷惑をかけないように一生懸命仕事に励んでいこうと思います。

本多さんは6月で満60歳になられたとのことですが、非常にお若く、来年も受賞されるのではないかとこの予感を覚えしました。本多さんありがとうございました。

広報課



## REMATウクライナ訓練

平成22年6月14日から19日までの6日間、REMAT線量評価班の実践能力向上を目的として、ウクライナのチェルノブイリ実汚染ゾーン内で放射線・放射能計測訓練を実施しました。REMAT (Radiation Emergency Medical Assistance Team)は2010年1月に放医研が立ちあげた緊急被ばく医療支援チームのことで放射線事故・テロを専門とする海外派遣部隊です。医師・看護師、保健物理要員、放射線防護要員から構成され、2010年7月10日時点での人員は医師7名を含む42名です。



写真1 現地測定機器の操作訓練

訓練はTESEC\*1の緊急時放射能測定訓練プログラムを利用して行われ、放医研からは3名が参加しました。主たるミッションは資機材搬送に関する関係省庁との調整並びに屋外汚染フィールドでの実計測、各種通信システムを用いたリアルタイムデータ共有実験でした。搬入装備はLaBr<sub>3</sub>スペクトロサーベイ、CsI(Tl)簡易体内放射能測定装置、個人用空気汚染モニタやインマルサット衛星通信システムに加え、個々の隊員は広帯域γ線サーベイ、α/β/γ表面汚染サーベイ、トレンド機能付きn/γ線個人線量計、3G+GSM方式データ通信器を装着しました。



写真2 汚染エリアでのREMAT機器測定訓練



写真3 訓練参加者—チェルノブイリ事故緊急作業員(リクイデータ)殉職慰霊碑前にて—

宿営地はチェルノブイリ事故後に廃棄されたキャンプ場でしたが、森林地帯の中央部に位置する事に加え、北緯50度という高緯度の為、衛星通信は十分な電界強度が得られませんでした。主たる給水は井戸水であり、井戸周辺の土壌からは1分測定で<sup>137</sup>Csが検出されました。β線スペクトロメータによる分析では<sup>137</sup>Csと<sup>90</sup>Sr-<sup>90</sup>Yが依然として残る現地でしたが、空間線量率は想定外に低く、宿営地では0.07μSv/h前後で日本と大差はなく、除外ゾーン内測定訓練地でも0.7μSv/hでした。事故を起こしたRBMK型4号炉入口ゲート付近ではさすがに7.5μSv/hを記録しましたが、大部分のエリアは1μSv/h以下でした。広島型原爆の500倍も<sup>137</sup>Csを放出しながら、蒸気爆発で数千メートル上空にまで核分裂生成物が吹き飛ばされたため、現場から130kmしか離れていないキエフに降り注いだ放射性物質の量は1200km離れたスウェーデンのイエブレの10%とのことです。この状況はサーベイメータの指示を見ると納得させられました。興味深いのはγ線スペクトルで、持ち込んだLaBr<sub>3</sub>シンチレーションスペクトロメータは起動するや否や一直線に662keVピークを刻み始めますが、土壌中での散乱のためコンプトンの低エネルギー領域が大きく膨らんでいました。原子炉の北西3kmには放棄された機密都市プリピャチがソビエト連邦時代の面影を強く残した廃墟として存在していますが、グラファイトと共に飛び散った<sup>90</sup>Sr-<sup>90</sup>Yは至る所にホットスポットを残し、汚染サーベイメータの指示値は100kcpmに迫る勢いでした。

訓練にはカナダ軍の緊急対応部隊も参加していましたが、無駄のない動作には学ぶべき点も多く、REMATの対応能力向上には非常に有益な経験でした。

\*1: European Centre of Technological Safety (TESEC), Kyiv, Ukraine,

緊急被ばく医療研究センター被ばく線量評価部  
鈴木 敏和



## 「放射線生命科学に関する放医研国際シンポジウム」の開催報告



写真1 Dr. E.A.Blakely(最前列左から4番目)を始め、多くの著名な研究者に参加して頂きました

国際オープンラボラトリーの3ユニットと理事長裁量経費創成的研究2課題の成果に対して、国内外からお招きした11名の著名な研究者(次ページ表の演者)から評価を行っていただくことを目的に、平成22年6月11-12日に放医研で「放射線生命科学に関する放医研国際シンポジウム」が開催されました(写真1)。

初日は、米倉理事長と辻井理事からの挨拶の後に、国際オープンラボラトリーの「粒子線治療モデル研究ユニット」、「粒子線分子生物学ユニット」、「宇宙放射線研究ユニット」の各著名研究者(Drs. A. Brahme, P.A. Jeggo, T.K. Hei)、ユニット長および協力研究者から各ユニットの紹介、成果等が報告されました。その後、理事長裁量経費創成的研究の「OpenPET原型の開発」について山谷チームリーダーから、同じく「低酸素下における幹がん細胞を標的にした癌診断と治療にむけての研究」について古川チームリーダーから研究成果が報告されました。

2日目の午前、前日の5研究課題についての評価とその報告が行われました。この時にはいずれの研究課題についても概ね高い評価が報告されましたが、最終評価結果は7月中旬ごろ迄に放医研に送られてくることになっています。

2日目の午後からは招聘した11名の著名研究者によって、地球外での宇宙線測定から、粒子放射線の物理学的特性を生かして最適化された照射法、種々の放射線が誘発する細胞および分子レベルでの応答、更には、高LET放射線誘発DNA二本鎖切断とその修復機構に至る講演が5つのセッションに分けて行われました。一つの会場で、しかもわずか半日で行われる講演会としてはあまりにも広範な分野の研究成果が披露されました。しかし、すべての講演の主目的は種々の放射線の生命に及ぼす影響に関する理解を深めることにあります。参加者はどの講演にも大変に高い関心を持ち、時には激しく活発な討論が行われました(写真2)。

今回のシンポジウムは金曜・土曜と週末にかかること、およびすべての発表と質疑応答が英語で行われることから、参加者数が少ないのではないかと危惧されていました。

しかし、記名参加者数は162名もあり、会場は常にはほぼ満席となりました。しかも、約4割が所外からの参加者であり、その約3分の1にあたる21人が外国からの参加者でした。今回のシンポジウムに参加するためだけに来日した外国人研究者もいて、まさに国際シンポジウムにふさわしい会合となりました。

なお、本シンポジウムの様子は、ケーブルテレビの「JCN千葉」で11日の夕方に放映され、JCN千葉のホームページにも掲載されました。

最後に、本シンポジウムの開催にあたっては張榮撥基金会から寄付金の一部を当てさせていただきました。本紙面をお借りして深くお礼申し上げます。

国際オープンラボラトリー運営室 伴 貞幸  
理事 辻井 博彦

### 講演会における演題名と発表者名

#### Session 1: Space Radiation (Chair: M. Kusakabe)

- Radiation dose assessments in space missions.  
Guenther Reitz (German Aerospace Center)
- Radiation Environment on the moon.  
Nobuyuki Hasebe (Waseda University)

#### Session 2: Radiation Physics (Chair: K. Noda)

- How to irradiate target volume with carbon beams using passive and scanning irradiation systems.  
Tatsuaki Kanai (Gunma University)
- Optimal use of light ions for radiation therapy.  
Anders Brahme (Karolinska Institute)

#### Session 3: Cellular Responses (Chair: M. Akashi)

- Genomic instability in non-targeted mammalian cells.  
Tom K. Hei (Columbia University Medical Center)
- Effects of low doses of energetic particles in cells and a tissue model.  
Kathryn D. Held (Harvard Medical School)



講演会における演題名と発表者名

Session 4: Molecular Responses (Chair: Y. Fujibayashi)

- LET-dependent molecular pathways.  
Eleanor A. Blakely (Lawrence Berkeley Natl. Lab.)
- Role of polyADP-ribosylation reaction in response to ionizing radiation.  
Mitsuko Masutani (National Cancer Research Center.)
- Genotoxic effects and repair of DNA-protein crosslink damage.  
Hiroshi Ide (Hiroshima University)

Session 5: DSB and its Repair (Chair: T. Kamada)

- The complexity of radiation-induced double strand breaks - Challenge for repair.  
Peter O' Neill, (University of Oxford)
- Examination of DNA double strand break induction and repair following exposure to heavy ions.  
Penelope A. Jeggo (University of Sussex)



写真2 2日間にわたり、放射線生命科学について活発な討論が行われました

お知らせ

独立行政法人 放射線医学総合研究所  
第17回公開講座  
「放射線のリスク、宇宙の放射線、  
重粒子線がん治療」

この公開講座では、放射線による人体への影響、障害の予防・治療・診断ならびに医学利用などの研究開発に関する取り組みや最新の成果について、最前線の研究者が一般の皆さんにわかりやすく紹介します。

今回は最初に、医療などに使われ身近な存在となっている放射線のリスクについて、科学的データに基づいて解説します。

次に、宇宙ステーションでの日本人の長期滞在が実現し、火星への有人探査が計画されている中、宇宙空間における放射線とその影響について紹介します。

最後に、最先端の放射線治療として世界をリードしている当所の重粒子線がん治療について、肝臓がんを中心にその照射方法や治療成績を詳しくご紹介いたします。主な講演プログラムは以下の通りです。

- 日 時:平成22年9月17日(金)、13:30~16:40(開場13:00)
- 場 所:千葉市美術館11F講堂(千葉市中央区中央3-10-8)
- 定 員:140名(入場無料・事前に申込みが必要です。先着順)
- 事前申込み:Webサイト([http://www.nirs.go.jp/news/event/2010/09\\_17.shtml](http://www.nirs.go.jp/news/event/2010/09_17.shtml))

又は以下にお申し込み下さい。

放射線医学総合研究所 広報課  
FAX 043-206-4062 E-mail kouza@nirs.go.jp

13:55~14:40「リスク学事始め -放射線を正しく怖がる-」  
放射線防護研究センター 規制科学総合研究グループ  
リスクコミュニケーション手法開発チームリーダー  
神田 玲子

14:40~15:25「宇宙における放射線」  
基盤技術センター研究基盤技術部放射線計測技術開発室長  
内堀 幸夫

15:45~16:30「消化器がんに対する重粒子線治療-肝臓がんを中心に-」  
重粒子医学センター病院治療課第3治療室医師  
今田 浩史

第17回 放医研公開講座

放射線のリスク  
宇宙の放射線・重粒子線がん治療

2010年9月17日(金)  
13:30~16:40(開場13:00)

千葉市美術館 11階 講堂  
千葉市中央区中央 3-10-8

入場無料

放医研の研究紹介  
原田 貞樹 企画部に所属

リスク学事始め~放射線を正しく怖がる~  
神田 玲子 放射線防護研究センター 規制科学総合研究グループ  
リスクコミュニケーション手法開発チームリーダー

宇宙における放射線~人類の新たな放射線環境へ挑戦~  
内堀 幸夫 基盤技術センター 研究基盤技術部放射線計測技術開発室長

消化器がんに対する重粒子線治療~肝臓がんを中心に~  
今田 浩史 重粒子医学センター 病院治療課第3治療室医師

※ 要領申込(事前にWEBまたはFAXより申し込み必須) \* 申込締切日  
<http://www.nirs.go.jp> ☎ 043-206-4062 〒043

主催:独立行政法人 放射線医学総合研究所  
お問い合わせ:放射線医学総合研究所 広報課  
TEL 043-206-3026  
FAX 043-206-4062  
E-mail kouza@nirs.go.jp



## アセチルコリン神経の賦活薬は大脳皮質基底核変性症、進行性核上性麻痺、前頭側頭型認知症の症状を改善するか？—PETを用いた画像研究—

脳内のアセチルコリンは認知機能に深く関与する神経伝達物質であり、アルツハイマー病のみならず、パーキンソン病においても脳内のアセチルコリンが欠乏することが認知症の発現に関与すると考えられています。実際、アルツハイマー病の治療薬として脳内のアセチルコリン神経を賦活させる薬剤が広く用いられており、認知機能を改善することが報告されています。我々はこれまでにPETを用いてアルツハイマー病やパーキンソン病においてアセチルコリンの分解酵素であるアセチルコリンエステラーゼ(AChE)活性をin vivoで定量測定評価し、両疾患で大脳皮質AChE活性が低下していることを報告しました。大脳皮質と視床のAChE活性はそれぞれマイネルトMeynert基底核と脳幹におけるアセチルコリン神経系活動と関連していると考えられています。今回、慢性進行性の神経難病であり、パーキンソン病の類縁疾患である大脳皮質基底核変性症と進行性核上性麻痺と、アルツハイマー病の類縁疾患である前頭側頭型認知症の3つの病気を対象として、PETとN-[11C]メチル-4-ピペリジルアセテート([<sup>11</sup>C]MP4A)を用いて脳内AChE活性をin vivoにて測定しました。この中で大脳皮質基底核変性症と前頭側頭型認知症については、生体において脳内アセチルコリン神経の働きを測定するのは世界で初めてです。

大脳皮質基底核変性症ではアルツハイマー病と同程度に大脳皮質においてアセチルコリン神経の働きが低下しており(図1上段)、その程度は認知機能障害の程度と相関していました。進行性核上性麻痺では大脳皮質の一部の他、視床においてアセチルコリン神経の働きが低下していました(図1中段2)。これは脳幹のアセチルコリン神経系活動の障害を反映しており、この病気の主な症状である転倒やバランスの障害などに関連していると考えられました。前頭側頭型認知症では脳内のアセチルコリン神経以外の神経の障害は認められませんでした(図1下段)。

今回のPET研究の結果より、大脳皮質基底核変性症と進行性核上性麻痺ではコリン神経系に障害があることが明らかになりました。大脳皮質基底核変性症においてこれらの神経疾患に対してもアセチルコリン神経系の機能を調節する薬が認知機能を改善する可能性があると考えられます。また、進行性核上性麻痺では転倒などの症状にコリン神経系の機

能を調節する薬が効くことが期待されます。他方、脳内のAChE活性の低下が見られなかった前頭側頭型認知症では、アセチルコリン神経系以外の神経系の障害によって認知症が引き起こされると考えられました(図2)。

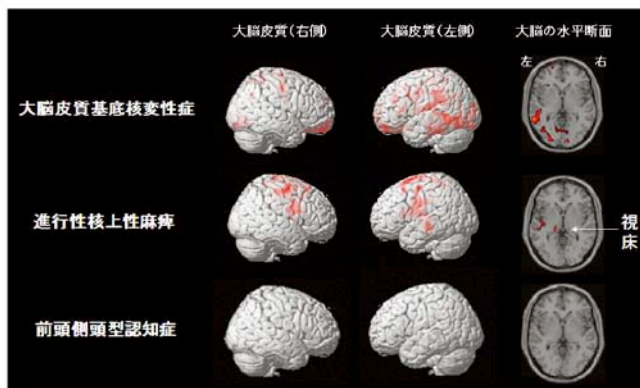


図1 大脳のアセチルコリンエステラーゼ活性が低下している部位(赤い部分は、健常者と比較したときのアセチルコリンエステラーゼ活性低下部位を示す)。大脳皮質基底核変性症では主に大脳皮質で、進行性核上性麻痺では大脳皮質の一部と視床で活性の低下を認めたが、前頭側頭型認知症では健常者との違いがなかった。

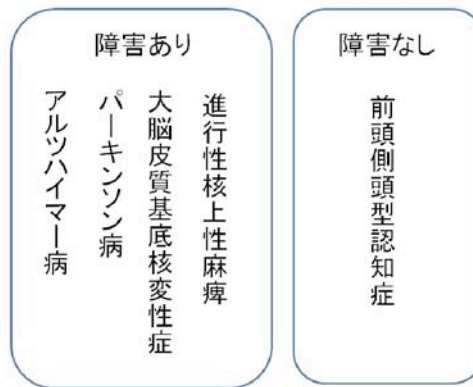


図2 脳内アセチルコリン神経

大脳皮質基底核変性症と進行性核上性麻痺ではパーキンソン病と同様にアセチルコリン神経の障害があることが分かりました。前頭側頭型認知症はアセチルコリン系神経の障害がなく、アルツハイマー病とは異なる神経系の障害で認知症をきたしていると考えられます。

分子イメージング研究センター  
分子神経イメージング研究グループ 平野 成樹

## 松本謙一郎氏がAOB研究会奨励賞を受賞



平成22年6月4日に兵庫県神戸市で開催された第10回AOB (Anti-Oxidant Biofactor) 研究会において、重粒子医科学センター・粒子線生物研究グループ・放射線効果修飾チームの松本謙一郎主任研究員が「奨励賞」を受賞しました。受賞の対象となった発表演題は「ニトロキシルラジカルと活性酸素種との反応性」です。

AOB研究会は、発酵抗酸化食品AOBおよびその他の抗酸化物質の生体への作用を科学的に議論することを目的として発足した研究会です。年に1回開催されており、毎年の発表演題の中から選考された2名の若手研究者に奨励賞が与えられます。

広報課

### 【概要】

抗酸化剤として知られるニトロキシルラジカルは、正常組織特異的放射線防御剤としても注目されており、既に米国では頸頭部癌の放射線治療に伴う脱毛を防止する目的でTEMPOLと呼ばれるニトロキシルラジカルの外部適用の臨床試験が進められています。松本氏の研究は、このニトロキシルラジカルと活性酸素種との反応性を定量的に捉えて比較することを試みたもので、ニトロキシルラジカルの種類によってヒドロキシルラジカルやスーパーオキシドとの反応性が異なり、TEMPOLがスーパーオキシドと比較的反応し易いことを明らかにしました。

### 【受賞のことば】

同賞は、昨年度の中西郁夫主任研究員の受賞に引き続き、同じ研究室から2年連続での受賞で、非常に喜ばしいことです。横浜薬科大学・小澤俊彦教授、日本薬科大学・安西和紀教授、および放医研の共同研究者の皆様深く感謝いたします。今後は、今回の研究内容を更に発展させて、研究を進めていきたいと思っております。

## NEWS REPORT

## 研究倫理審査委員会の委員長を引き受けるにあたって 【荻生俊昭新委員長】



平成22年4月に研究倫理審査委員会の委員となり、5月に安藤前委員長の病院長就任に伴い後任の委員長に指名されました。この委員会の役割は、被験者や調査対象者の立場に立ち、その権利と安全の確保、個人情報の保護等を目的として研究課題を審査することと理解しています。

個人情報の保護及び使用する薬剤や被ばく線量についての安全性確保は当然ですが、被験者や調査対象者の立場に立ち、協力した研究計画は有意義か、データが有効に使われるかという点にも注意を払う必要があります。従って、被験者数は統計学的に有意か等の研究デザインの検証も必要と考えています。

事業仕分けで見られたように外部から研究を見る目には厳しいものがあります。研究課題の立案や実施に万全を期するこ

とは、放医研を守ることに直結します。そのために手続きや手順がやや煩雑になることもやむを得ませんが、速やかな審査を心がけたいと思います。申請課題では臨床研究が多いのですが、ゲノム研究や疫学研究など放医研全体を視野に入れた普遍性のある議論も重要です。各委員には利益代表としてではなく、申請課題を如何に外部の批判に耐え有意義なものにするか、被験者や調査対象者等の立場をどう守るかという視点での辛口の審議をお願いしました。

研究計画をチェックするための体制や規定、指針等は恒常的に見直す必要があります。委員会では昨年度から安藤前委員長を中心に研究支援体制や規定等についての議論を進めて来て、7月に「研究倫理審査委員会からの要望書」として理事長に提出しました。これまでの議論と意見集約に努力された安藤前委員長、各委員、事務局各位に敬意を表するとともに、今後の放医研内での検討に期待しています。

末筆ながら、今後とも研究倫理審査委員会の活動に理解と協力をいただきたいと思います。

研究倫理審査委員会委員長 荻生 俊昭